坂林
SAKABAYASHI
随筆特集

酒林

SAKABAYASHI

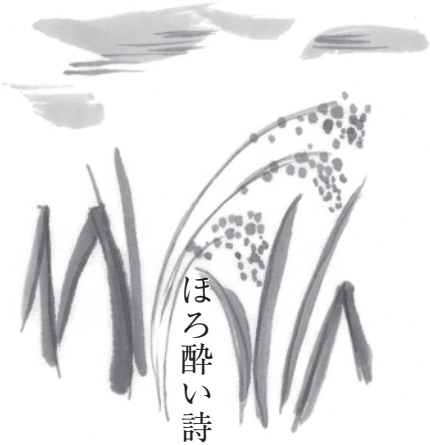
随筆特集

第80号

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



黒澤明生誕百年　池井　優…4

臓器移植ドナー　高橋和島…6

絵と文　浅草のこと　堂　昌一…8

私のみた白川静の顔　安森敏隆…9

ほろ酔い詩歌紀行――甘酒屋打出の浜　日高昭二…11

私の「宮澤賢治」　内野潤子…13

ボストンからミシガンへ　宮地智子…15

Ⅱ型糖尿病は相続される？　杉本忠夫…17

絵と文　ルドベキア　中西美子…19

夢と『夢日記』　志村有弘…20

絵と文▨　目覚まし時計　佐川毅彦…22

「物と形と動き」　志村栄守…23

真夏のボタン雪　桐原良光…25

水鉄砲をふたつもらった　片岡義男…27

絵葉書に励まされて　新田啓造…29

絵と文▨　型絵染版画オーストリアで実った

「テンノーワイン」の話　さかもと　ふさ…31

尺八物語　永岡慶之助…32

一線　山本千明…34

命について思う　宮本富夫…36

小説・江戸神仏歳時記（22）―千駄ヶ谷・鳩森（はとのもり）八幡神社　郡　順史…38

表紙・グラビア…さぬき保多織

黒澤明生誕百年

池井　優
（慶應義塾大学名誉教授）

黒澤明―言うまでもなく日本映画を世界的にした巨匠である。黒澤の名を世界にひろめたのは一九五一年九月「羅生門」のベネチア国際映画祭におけるグランプリの受賞であった。この受賞は全く予期せざるできごとであった。黒澤自身この作品が国際映画祭に出品されたことすら知らなかったのだ。九月十日の授賞式の席上グランプリ授賞が決まり、日本に伝えられた日、黒澤は自宅近くの多摩川へ釣りに行き、糸を切られ収穫ゼロで帰宅した。重い足取りで玄関の戸を開けると、夫人が飛び出してきた。

「あなた、おめでとうございます」

「なんだ」

「国際映画祭で最高の賞をいただいたとの連絡がありました」

芥川龍之介の原作『藪の中』を下敷きに戦禍と疫病と天災の打ちつづく平安時代の風俗を映画化したこの作品は、一部のインテリ層には支持されたが、一般のファンには「わかりにくい」と不評で興行成績ももうひとつだった。会社も黒澤作品は当らないと受賞にもはじめは冷淡だった。黒澤の師匠にあたる山本嘉次郎監督は「黒澤明グランプリ、永田雅一（大映社長）シランプリ」と皮肉った。だが、グランプリに与えられる「サンマルコの獅子像」がイタリアから到着してこの賞の重みを知ることになる。

「羅生門」の出品は、ひとりのイタリア人女性の努力なくしてはあり得なかった。日伊交換留学生として来日、京大で日本の古美術と日本文学を研究したストラミジョリ女史は、当時イタリア・フィルム社の社長として、イタリア映画の日本への輸出を手掛ける傍

ら、こまめに日本映画を見て歩いた。
テーマの扱い方、描き方、そこに流れる精神と人間性に打たれた女史は、「羅生門」を母国イタリアの国際映画祭に出品すべきだと考え働きかけた。しかし、日本側特に大映本社は乗り気でなかった。イタリア語の字幕をいれる費用の三十五万円さえ出そうとせず、ストラミジョリさんが工面したほどだった。

グランプリ受賞によって、敗戦に打ちひしがれていた日本人は驚喜し、「羅生門」に各国から買い付けの注文が大映に殺到した。日本映画の海外進出に先鞭をつけることになり、黒澤は世界に通用する映画監督となった。黒澤の名を不動にしたのは大作「七人の侍」であった。一九五四年に予定を大幅にオーバーする十一カ月、通常の制作費の五倍となる二億一千万円を要して完成し、公開されたこの作品―無名の侍が寒村を襲う野武士の集団をやっつける物語は、理想の人間像を描くと同時に壮大な活劇シーンと相まって大ヒットとなり、海外にも大きな影響を与えた。ハリウッドでは、この作品の翻案「荒野の七人」が制作され、「ゴッドファーザー」のコッポラ、「スター・ウォーズ」のルーカス、「ジョーズ」のスピルバーグなど欧米の若い映画監督はすべて「七人の侍」をはじめとする黒澤の映画に大きな影響を受けた。

黒澤は中学時代、内外の文学を読み漁った。それがシェークスピアの「マクベス」を鎧で能の様式美を追及した「蜘蛛巣城」となり、ドストエフスキー「どん底」の日本版となって結実した。アメリカとの合併映画、真珠湾攻撃を中心とする日米開戦を描く「トラ、トラ、トラ！」は、制作方法の食い違いから途中で監督を降りる事態に発展したが、三十年も温めた企画「デルス・ウザーラ」は当時にソ連の全面的協力によってアカデミー賞最優秀外国映画賞に輝く大作となった。一九七四年四月四日、シベリアの荒野に六十四歳の黒澤の力強い声が響いた。

「プリガトーピリシ（用意）！ナチーリ（スタート）！」

シベリアの密林を舞台に狩猟で生活する少数民族のデルス、自然との闘い、ロシア人の探検隊長との友情などを盛り込んだスケールの大きい作品は、アメリカのみならず、ロシアにおいても黒澤の名を不動のものとした。

黒澤は八十八年の生涯のなかで、デビュー作「姿三四郎」から遺作となった「まあだだよ」まで合計三十の作品を残したが、どの作品にも全力投球、一作撮り終わると廃人のようになって入院するほどの入れ込みよう。撮影現場を見た吉村公三郎監督が「クロサン、映画なんてそう死に物狂いで撮るものじゃないよ」と忠告したほどだった。

黒澤作品から、国際的スター三船敏郎が誕生し、精密なセット、望遠レンズの多用、複数カメラの使用、脚本の共同執筆など映画制作に大きな影響を与えた。

黒澤生誕百年、さまざまなイベントからこの巨匠は改めて見直されるであろう。

臓器移植ドナー

高橋和島
（作家・郷土史家）

計画はまだ進行中ながら、わたしは腎臓移植のドナーを務めることになった。臓器を進呈する相手はカミさんである。

家内が腎不全となって人工透析を始めたのは五年前から。日本の同種の患者数は約三十万人だそうだが、この人工透析なる病気処置法、患者の負担は半端ではない。

家内の場合は、隔日通院が求められる血液透析ではなく、自宅で患者自身が処置する腹膜透析だけれど、一日四回、通算六時間前後の治療時間を必要とする。つまり、毎日、人工透析に振り回されて暮らしているわけだ。

この拘束される時間の長さは周囲の者にとって見るに忍びないものがあり、腎臓移植を本気で検討するきっかけとなった。

と言っても、最初からわたしがドナーになることを考えたわけではない。五年前に癌で胃を失っている七十過ぎのポンコツ老人の腎臓なぞ使いものになるまいと決めてかかっていたからだ。

ところが、岐阜の国立大学病院で、八十一歳の老母が息子に腎臓を提供、生着に成功したケースがあると聞き、ひょっとしたら俺もドナーになれるかも…と考えるようになった。

カネがあれば海外へ出掛けて移植手術を受ければいいということになるが、アジアの某国でも五百万円以上、米国あたりなら一千万円以上必要というから、ビンボー人はかなり無理をしなければならない。家内には七十過ぎのポンコツ腎臓で我慢してもらうしか道はなかった。

あちこちから情報を集めると、わたしの住んでいる地域ではまず腎臓移植

で実績のある名古屋のN病院臓器移植相談室へ行くべしということになり、今年六月三日、われら夫婦は揃って出掛けてみた。

事の運びは驚くほど早かった。

その日のうちに二人は幾つかの検査を受けて最初の関門をパス、以降、それぞれが二ヵ月間に通算四回の通院および一週間の入院検査を受けた。

二人にとっては、

「手術は無理ですね。諦めてください」

と医師から宣告されるのを怖れながらの検査漬けの日々であった。

検査の中身は一口で言えば、念には念を入れた人間ドック。ドナーとなるわたしに関しては、手術に耐えるかどうか、使いものになる腎臓を保有しているかどうかをチェックするための検査だった。

全ての検査が終わり、移植手術が可能かどうかを告げられる日がやって来た。

われら夫婦のほか、病院側の求めもあって、別所帯を持っている息子と娘も医師の説明を聞く場に立ち会うことになった。

検査結果を告げるのは腎臓移植の大家と聞かされていたU先生である。

先生は刑事裁判における裁判官のように主文、つまり手術ができるかできないかを冒頭に述べることなしに、ドナー希望者のわたしに何かと問題があると話し出した。

曰く肺に長年（五十年以上）タバコを吸ってきた咎めが出ている。曰く腎臓の働きに懸念がないでもない。曰く血糖値が高い。

家内や息子と顔を見合わせたわたしは手術は無理という言葉を聞かされるのを覚悟して、結論を待った。

やがて、U先生の口から出てきた言葉は、「ま、しかし、大丈夫、やれますよ」

であった。

手術は一ケ月半後ということに決まった。半ば以上、門前払いを覚悟していたわたしにとっては、本当の事の始まりはこれからだというのに、大きな喜びであった。

もし、何か問題があって、ドナーとなるのは無理ですと宣告されたら、わたしはおそらく、移植手術を諦めねばならない家内本人以上にひどく落ち込んでいたに違いない。

「おまえさんはもう、やはりポンコツで、ヒトの役には立たないよ」

と言われるのと同じであり、亭主としての面目を全く失うことになるからだ。

検査入院期間中に知り合った腎臓移植当事者は、兄弟姉妹、親子もあったが、わたしたちのような夫婦が一番多く、しかも夫がドナーというケースが目立った。

彼ら亭主諸氏がドナーになるに当たって沽券とか面目なぞという馬鹿なことを考えたかどうかは訊いていないが、わたしにとっては大事なことだったのである。

この原稿が活字になる頃には終わっているはずの肝心の手術結果のほうは、機会があったら報告させていただくことにする。

浅草のこと

堂　昌一

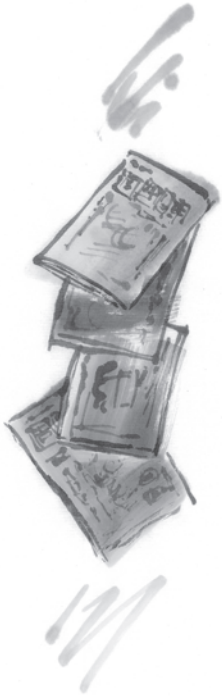
私は浅草向島の生れの浅草育ち、浅間（せんげん）神社の裏手にある「冨士小学校」出身です。浅間神社は「お冨士さん植木市」で賑わいます。子供の頃の遊びは浅草（せんそう）寺周辺でしたから今思うと下町のいたずらっ子でした。浅間神社の横に石を積んだ「ミニ冨士」があります。そこにお参りに来られる方がいるようです。浅草寺のすぐ近くにあるのが浅草（あさくさ）神社（三社様ともいう）でお祭りは三大祭りに入る盛大なものです。私もお祭り好き、今だに祭りときくとわくわくします。

仲見世は昔（五十年位前）は浅草芸者が行き交い、威勢の良いお兄さん達が印半天で走り廻っていました。戦後新仲見世が出来、今は観光地で様々な国の人々で賑わっています。

気っぷの良さで売れていた浅草芸者も数少なくなったそうだ。下町情緒が遠ざかるようで寂しいこの頃です。

私のみた白川静の顔

安森敏隆
（同志社女子大学教授・歌人）



大正十一年に創刊第一号を出した「ポトナム」が、平成二十一年八月号で「一〇〇〇号」を出版した。その記念すべき「ポトナム　一〇〇〇号」（平成二十一年八月一日発行）の「グラビアページ」には、平成十五年六月「ポトナム全国大会・京都」に、講演に来ていただいた折の、ポトナム編集委員と一緒に撮っていただいた白川静先生の写真が載っている。

「ポトナム」は創刊当時から「よい詩（うた）は良い人格から生まれる」を合言葉としてきた。明治三十年代に創刊された「心の花」は「おのがじし」を、「アララギ」は「写生」を、「明星」は「ロマンチシズム」を言い、尾上柴舟の「水甕」は「和して同ぜず」を標榜していた。その尾上柴舟の門下の一人、小泉苳三によって、「ポトナム」は創設され「よい詩はよい人格から生まれる」という「詩」と「人格」を文学の根っこにおいたて今日まできたのである。

「ポトナム」は、京城で女学校の教師をしていた小泉苳三や百瀬千尋らによって、ヤナギ（白楊）を意味する「ポトナム」と名付けられ、その後多くの先人たちに引き継がれ今日まできた。そして、その上で「ポトナム」の主張となる「現実的新抒情主義」を昭和八年の「一月号」で提唱した。この主張が昭和初期から、日中戦争、第二次世界大戦にむかって「著しい変貌」を遂げてきた時代と社会をとらえるパースペクティヴともなったのである。その、昭和の一〇年代の激動の時代に、白川静先生は、「ポトナム」の同人として活躍され、戦後も三年ばかり「ポトナム」に所属されていたのである。

私の身近な白川静先生の顔には、「ポトナム」初期の歌人としての顔と、立命館大学教授として学問を受けた先生

としての顔と、晩年になって「ポトナムの顧問」をしていただいた折の、三つの顔がある。

その中でも、学生時代、先生の教えていただいた学者としての白川静の顔は最も身近なものとして、今も私の瞼の底にありありと残っている。

先生は、昭和十八年（一九四三）年、立命館大学に予科教授として奉職され、退職されて自由の身になられるまでの立命館大学の先生としての顔がある。

先生は、授業のほかは、自分の研究室でそのほとんどを費やされていた。学生時代、先生の研究室を畏友の清水凱夫君に連れられて何度か訪ねたことがある。おいしい中国のお茶をいただき、中国の綺麗な壺に入った飴を頂いたものである。

授業では、鉄筆で一字一字綿密に書かれた先生手作りのザラバン紙綴じの「左伝」（春秋左氏伝）を持ち、勉強したものである。

高橋和巳のエッセイにも書かれているが、その後の、激しくなってきた学生運動のバリケードの中にあって、先生の部屋だけは夜遅くまで煌々と灯がついて研究されていて、学生たちはその威厳のある灯をただただ見上げていた。先の「ポトナム全国大会・京都」の御講演の後で、こっそり教えて下さったのだが「あの時は、学生たちのマイクの騒音に負けないくらいに、研究室では謡曲をかけていたのじゃよ。ハハハ…」と笑いながらおっしゃった茶目っ気のある先生の笑顔は忘れられない。

最近、白川静先生の生誕百年を記念して、長女の津崎史さんが歌集『風』（みぎわ書房）を出された。

父の夢をわが夢として時機待たむ字書の翻訳なる日信じて（津崎史『風』）

歌集の表紙は薄緑で、題名の「風」という字がみごとな甲骨文字で書かれていて、まさに鳥が空を飛んでいるような、龍が中空を駆け上っているような趣がある。全体は Ⅰ「季のめぐり・わが日常」（六一首） Ⅱ「父子草・母子草」（三九首）の一〇〇首で構成されている。私は、この一連の中の「父子草・母子草」の三十九首に心ひかれて一挙に読んだことである。「母子草」は、春の七草のひとつの「ゴギョウ（オギョウ）」ともいうキク科の越年草である。「父子草」はキク科の多年草である。「母子草」は白い綿毛を被っている茎や葉の様子が、母親がわが子を包みこむように見えることからつけられたとも言われている。「父子草」は「母子草」に対して名づけられたものである。この歌、「父の夢」を「わが夢」として待たんとうたわれている。まさに「父子草」そのものである。父とは、字書三部作『字統』（一九八四年）、『字訓』（一九八七年）、「字通」（一九九六年）をあらわし、甲骨文字や金文などから漢字の成立を究明した中国文学の泰斗・白川静である。まさに、父が追究してきた「字書」が世界に向かって「翻訳」されん日を信じて、父の夢に一体化せんとする歌である。

ほろ酔い詩歌紀行――甘酒屋打出の浜

日高昭二
（神奈川大学教授）

正岡子規といえば、酒よりも食べ物であろう。なかでも、くだものの類には目がなかったようだ。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

明治二十八年作のこの句など、もっともよく知られている一句であろう。故郷の松山から東京に帰る際、途中で三日ほど奈良に遊んだときの句である。子規自身も、この句はだいぶ得意であったとみえて、従来の詩人や歌よみには思いもよらなかった「奈良と柿」という「新しい配合を見つけ出して非常に嬉しかった」と、随筆「くだもの」（明治三十四年）のなかで記している。くだものなら何でも食べた子規であるが、とくに柿は好物で、一度に十個ぐらいは食べたという。

そういう子規に比べて、彼の父のほうは、大酒飲みであったという。松山藩士で御馬廻を勤め、四十歳で家督を長男の子規に譲っているが、その直後に急死している。「筆まかせ」（明治二十三年）のなかで、「毎日一升位の酒を傾け給ひ、それが為に身体の衰弱を来し」などと回想している。幼い日々にそういう父を見ていたからであろうか、子規の生活周辺には、酒の気配が少ないが、しかし印象深い歌はある。

長安の市の酒屋の桃咲きて李白が鼾日斜めならんとす

明治三十一年の「百中十首」のなかにみえる歌である。年少の頃に松山で漢詩グループに入っていたという子規の、いわゆる漢詩趣味をうかがわせる歌と言ってよく、長安の都に思いを馳せ、桃の花の下に酒仙李白を配して、鼾をかかせている景色への空想である。

善き酒のもたひの春もなごりかな惜しむべき落花君掃ふ莫れ

これもまた漢詩調の歌で、芭蕉よりも蕪村を尊敬していた子規の姿を彷彿とさせる。もたひ＝瓶に残り少なくなっ

た春の酒を、落花の舞の風情とともに感じさせる景色がいい。

漢詩趣味、漢詩調によって空想に遊ぶ一面もあった子規であるが、しかしこのころすでに病を得て、やがて病臥を余儀なくされる日々となる。そうした子規の姿が随筆「墨汁一滴」や「病牀六尺」、さらには「仰臥漫録」という日記につづられていることは周知のところだ。後者には、「食前ニ必ズ葡萄酒（渋イノ）一杯飲む」とあるほか、粥、刺身、菓子パンなど、毎日の食事のメニューが事細かに記されている。

何しろ、限られた生活の空間である。そのなかで、草花のスケッチがあり、病状の記録もあるわけだが、それらを通じて彼の俳句観の要諦ともいうべき「写生」の実際が、次々と、じつにリアルに示されてもいる。

たとえば、「墨汁一滴」の明治三十四年四月二十八日の記事には、机の上に活けている藤の花が目に入って、その「いとよく水をあげて花は今を盛りの有様」なのを見て、いっきに藤の連作がよまれる。

瓶にさす藤の花ぶさみじかればたたみの上にとどかざりけり

この歌は、もちろんよく知られている歌であるが、この連作にはまた次のような歌もある。

八入折の酒にひたせばしをれたる藤なみの花よみがへり咲く

八入折（やしおおり）の酒とは、幾回もくりかえして醸したよい酒のことで、古くは「古事記」にも出てくる言葉だという。そうした酒と、それにひたすことでよみがえった藤の花という取り合わせが、生命のいとしさをひしひしと感じさせる。

一方、「病牀六尺」のなかでは、たとえば碧梧桐が称賛してやまない松瀬青々の句をめぐって、真摯なやりとりを重ねていく光景もある。

甘酒屋打出の浜に卸しけり

この句の「卸しけり」の意味がわからないとする子規が、それは甘酒の荷をおろしたことだという説明を聞いているうちに、しだいにこの句の「趣味の現はしかた」に思い至り、まるで「甘酒屋に扮した千両役者が舞台空間を占領した」ような「愉快な心持ち」になっていく。一句の解釈をめぐる、この二人の光景も、またうるわしい。

痰一斗糸瓜の水も間に合はず

絶筆三句のうちの一句である。斗酒なお辞せずという言葉があるが、李白のような酒飲みとはちがって、一斗の痰を吐く自分は、痰を切るのに効果があるとされる糸瓜の水を取るのも間にあわなかったという句である。子規が亡くなったのは、旧暦の十七日。その前々日が十五夜で、そのときに糸瓜の水を取る慣習があったのである。

私の「宮澤賢治」

内野潤子
（歌人・エッセイスト）

今『宮澤賢治』という一冊の本が、私の手元に残っている。

この本は戦時中の昭和十七年九月に冨山房から発行されたもので、定価四円八十銭と記されている。

多分後年もの書きになった兄井口朝生が求めてきて、私に呉れた本だと思う。兄は女学生になった私に、次々いろいろの本をすすめてくれた。

娘のエーヴ・キュリーの書いた『キュリー夫人伝』の厚い本も、毎日少しづつ読んで忘れられない印象深い本である。

十四・五歳に出会った本は特別な力で体の一部になっているような気がする。

『宮澤賢治』との出会いも、この本だけではなく何冊かあったものが、三回の引越しでなくなってこの一冊のみになってしまった。

作者は花巻病院長の佐藤隆房となっている。子供向けのような易しい文章で、賢治の一生が綴られている。

表紙も賢治の「兎」という絵で、広い空に向かって、小さい兎が手を振っている姿が描かれている。

序によれば、「はじめは後輩であり、それから親友となった賢治さんの思い出にもとこの小伝をあらはしました。さきに脱稿して二、三の人々に見せました処、過褒のように思われる点があると評せられました。そこで再校したのです。それでも尚過褒に見える処もあるかと思われます。

でもありのまま書けば、こう書くより外ありません。昭和十四年二月脱稿して以来、再考と補遺に日を送り、今日出版の日に会うことになりました。

文中、すべて「賢治さん」の呼称を用いております。すべては過去の人のことなのですが、親しき友を偲ぶ時、幽明相通ずるものがあって、中々「賢治」と呼び難いのであります。御諒察を頂きます。

各編は年次に従って編纂したのでありますが、多少前後してゐる処もあるかと存じます。尚書中の人名の多くは仮名になっております。

終りに逸話の材料をお示し下さいました各位、並びに各種写真及び詳細な年譜を提供して下さいました宮澤清六君に謹みて御礼申し上げます」

と記されている。何という謙虚な序文であろう。清六は賢治の弟に当たる人である。

この本には処々賢治の書いた戯書や、写真が入っていて、賢治がどのようにして成長したかが、よく分かる本でもあった。

幼い頃の逸話も童話のように柔らかく書かれていて、物語を聞くように温かい。

あの有名な詩「雨ニモ負ケズ」をこの本で初めて知った。戦時中の禁欲的な生活には、何か大変身近な思いがした。

女学校の親しい友人の一人が、私が「宮澤賢治・宮澤賢治」と言うのを聞いて、その当時高村高太郎が書いた「雨ニモ負ケズ」の拓軸が売られていたのを新聞で知り取りよせて、私にプレゼントしてくれた。それはただ紙の軸物になっている粗末なものだったが、友人の心遣いが嬉しく、自分の狭い三畳の部屋にかけて朝夕眺めて喜んでいた。

やがて戦争も激しくなり、学徒動員の生活になった折も、「雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ」は私の背中を支えてくれる言葉だった。

動員されていた大学生の手帳にも賢治のこの詩が書かれていた。戦中戦後変容しない願いがこの詩にはあったのだろう。

昭和二十年八月敗戦の日が来た。もうその前後から食糧がなくて「玄米四合ト味噌ト少シノ野菜」すらなく、苦しい日々にも賢治の童話や美しい言葉は色褪せることなく残っていた。この本の大切なのは、弟清六による賢治の実に細かい年譜である。

私はその年譜も暗記する程読んだのだ。

敗戦の八月の翌月、九月に女学校を卒業して入学した実践の国文科の入学式が行われていた。渋谷にある女専の校舎も空襲に焼けて本当に床はコンクリート、窓もガラスなしの教室であった。女専の友人の中に高知尾さんといふ人がいた。私は年譜の中に賢治が大正十年二十六歳の折、日蓮の教えを布教したいと上京、国柱会に奉仕した事があり、国柱会の高知尾知耀氏のすすめで文芸により大衆教典を広めむと決意する件(くだり)を思いだした。

ある日私はその友人に「貴女国柱会の方」と尋ねた。「よくご存知ね」と彼女は驚いて私を見た。「高知尾知耀は私の父よ」と言う。

私もまるで昔からの知人に会ったように嬉しかった。「宮澤賢治が好きなの」と言うと「面白いわね」と笑いながら「清六さん家によくいらしたのよ」と言う。幻の世界が拓けたような気分になったのを覚えている。

高知尾芳枝さんはそれ以来の私の大切な友人になった。秀才の彼女は女専を出て東大の哲学科に入った。国柱会で行なはれた彼女の結婚式にも友人代表で名を連ねたのである。

宮澤賢治のご縁という外はない。

ボストンからミシガンへ

宮地智子
（詩人）

アメリカのボストンからニューヨークへ移り、そして再びボストンで生活していた娘一家は、研修医の身分を卒業してミシガン州立大学のアシスタントプロフェッサーとして赴任することになった一家の主（あるじ）に従い、今回ミシガン州の州都であるランシング市に移り住むことになった。外科医として学ぶべきことの多いアメリカであることは門外漢の私にも想像できることではあるが、いざ職を得るとなると様々な要素が絡んで、ニューヨークやボストンでの就職はついに叶わなかったようだ。私は、娘夫妻の交わす会話から類推するだけであるが、その困難さのひとつの要因として、仕事のために家庭を犠牲にしないことを最優先する、ということがある。当然といえば当然の話であるが、家族が揃って暮らすことのできる職場を求めた訳である。夫婦であると同時に、師弟関係でもある娘婿と娘が同じ職場で働くことができるという幸運に恵まれたことは喜ばしいことである。

さて、引越しは六月の半ば。孫の世話係として私が日本からボストンに到着したその日は、オーペアーとして一年間、孫達の世話をしてくれたまゆみさんの送別会の日でもあった。ボストン名物のロブスターやクラムチャウダーなどのご馳走を囲んで、一年ぶりに再会した彼女はまだ二十代半ばのお嬢さんである。二歳と一歳のチビちゃん達を、三歳と二歳に無事成長するまでよく世話をしてくれましたね。有難う。とお礼の言葉が口をついて出てくる。彼女もまた成長したようだった。

引越し荷物を送り出した後、一家四人におばあちゃんが加わった一行は、お父さんの運転するカローラに乗って大陸を西に向かって出発した。瀟洒（しょうしゃ）な街並が続くボストンを離れ見渡す限り平野が広がる大地のなかをまっすぐに走り続けること正味五時間。途中、山も川も、小さな丘さえない真っ平らな